二〇二四年一二月二〇日

クリスマスソングで締めるお茶の会　あひる
冬の波皆老いゐたり島の友　うつぎ
寒禽の山城趾に高鳴きす　む　べ
保母さんに渡す木の実のお礼かな　なつき
臥す母もあひ和すクリスマスソング　あひる
湯豆腐の面のふつふつゆるびをり　風　民
紺碧の湖へ張り出す金鈴子　うつぎ
ひと枝に声の集ひし冬桜　澄　子
臥せし日の空白のある日記果つ　康　子

二〇二四年一二月一九日

ひとすぢの畦焼く煙山日和　む　べ
手でつまみ見る干し柿の出来具合　はく子
臥す母に障子開ければ日矢届く　せいじ
語らひの時を惜しみて日短　うつぎ
冬日差す図書館棚の薄ぼこり　わたる
冬日向行きつ戻りつウォーキング　康　子
蒼穹に線画を描く大枯木　む　べ
海光に熟れゆく島の蜜柑山　千　鶴

二〇二四年一二月一八日

山々を見上ぐ皇帝ダリアかな　風　民
閑けさや鉄瓶滾る冬座敷　澄　子
数え日や明日退院の許し出る　董　雨
高舞ひて鳥の群れめく日の木の葉　む　べ
カラフルな帽子卒寿の冬耕子　かかし
炭焼翁煤けし顔の八重歯かな　かかし
枝絡む冬の日差しや雑木林　風　民
軒掛の夕日に凍てる輪橇　ほたる
ふかふかと試歩に優しき落葉道　康　子
市庁舎に見下ろす銀杏黄葉かな　む　べ
幸せやいつものように賀状書く　明日香
クリスマスソングを手向く柩かな　あひる

二〇二四年一二月一六日

フレームのベンチに赤きサンタ像　えいじ
顔歪むぎつくり腰に来る嚔　うつぎ
生かされしことに感謝や新日記　康　子

二〇二四年一二月一五日

ひとり居に広すぎる家寒灯　うつぎ
極月や病院食の遅きこと　董　雨
モダンなる遺愛の火鉢蘆花旧居　む　べ
放り込む藷ニ三個や落葉焚き　千　鶴
母に手を引かれをさなら聖夜劇　む　べ
一服の茶も気忙しく年用意　千　鶴
黄落の道まつすぐに華やぎぬ　やよい
冬ざるる詣で人なき一末社　もとこ
新築の家に声ある十二月　風　民

二〇二四年一二月一四日

枯れ菊に寄りて屈めば名残の香　たか子
古民家の軋む板廊北塞ぐ　む　べ
晩学の集ひ聖菓に和みけり　あひる
スピッツが屏風の虎に咆哮す　澄　子
人波に急かされ歩く街師走　もとこ
枯れ尾花なぞへになだれ伏しにけり　明日香

毎日句会みのる選・二〇二四年一二月二二日